



---

---

# あたらしい 農業技術

---

---

No.522

香味際だつ晩生品種「はるみどり」

平成 21 年度



## 要 旨

### 1 技術、情報の内容及び特徴

- (1) 野菜茶業試験場（現 独立行政法人野菜茶業研究所）が平成 12 年に育成した緑茶用晩生品種「はるみどり」について、静岡県における早晩性、耐寒性、耐病虫性、収量性、品質等の諸特性を明らかにした。
- (2) 「はるみどり」の一番茶摘採日は、「やぶきた」と比較して本場（牧之原）では 3 日遅く、「かなやみどり」とほぼ同じである。山間地（川根）では同じく 4 日遅く、「かなやみどり」より 2 日早い。
- (3) 「はるみどり」は耐寒性（赤枯れ）が強く、炭疽病は「やぶきた」よりも強い。また、クワシロカイガラムシに対しては「やぶきた」よりもやや弱い。
- (4) 「はるみどり」の収量性は、10 a 当たり収量では「やぶきた」と比較して一番茶が 152%、年間（一番茶、二番茶の合計）では 137%と多い。
- (5) 「はるみどり」の品質は、「やぶきた」と比較して形状、色沢、香気、水色、滋味の合計点で一番茶が 104%、二番茶が 106%と良好である。概評では鮮緑、甘い香り、芳香、旨味等である。

### 2 技術、情報の適用効果

- (1) 「やぶきた」と比較して一番茶摘採期が 3～4 日遅いため、品種組合せが可能であり、摘採期の分散、製茶工場の稼働率向上などに有効である。
- (2) 品質が優れるため、上級茶の生産及び商品化、また、品質を活かした産地ブランド化が可能である。

### 3 適用範囲

- (1) 本品種は調査した本場（牧之原）、山間地（川根）、富士分場（富士）のいずれも冬期の寒害に比較的強く、収量性も「やぶきた」以上であったことから、県下全域に適する品種である。
- (2) 本品種は高い品質がセールスポイントであるため、その品質を活かせる経営に適する。

### 4 普及上の留意点

- (1) 定植後の初期生育がやや緩慢のため、肥培管理など十分な管理が必要である。
- (2) 開張型のため、強いせん枝を避け、樹高を上げるよう管理をする。

## 目 次

はじめに	1
1 来歴及び試験経過	1
2 一般特性	1
(1) 早晚性	1
(2) 生育特性	2
(3) 寒害及び病虫害抵抗性	2
3 収量特性	4
4 品質特性	5
5 特性のまとめ	6
6 適地及び栽培上の留意点	6
おわりに	7
参考文献	7

## はじめに

「やぶきた」が誕生して100年余りが経過しました。スーパー品種「やぶきた」は、現在全国の茶園の75%、静岡県に至っては実に93%の茶園に普及し、本県茶業のみならず日本茶業発展の原動力となってきました。

しかしながら、近年では摘採期の集中化や病害虫の多発、香味の画一化等「やぶきた」偏重の弊害が顕在化し、低迷する茶業情勢の中で新しい品種の開発、普及が急務となっています。

今回紹介する「はるみどり」は、他機関において育成され既に登録されている品種ですが、当研究センターにおいて本県での適応性を調査した結果、生育、品質面での優秀性を確認しましたので、本品種の諸特性を紹介します。

## 1 来歴及び試験経過

- ・来歴 ♀かなやみどり×♂やぶきた
- ・登録年 2000年（農林登録）
- ・育成場所 野菜茶業試験場枕崎支場（現 独立行政法人野菜茶業研究所）
- ・奨励品種決定予備試験 1993～1998年
- ・奨励品種選定試験 2000～2005年

## 2 一般特性

### （1）早晩性

「はるみどり」の一番茶萌芽期は、「やぶきた」と比較し本場（牧之原、以下同）では6日遅く、山間地（川根、以下同）では7日遅くなりました。「かなやみどり」との比較では、本場、山間地でそれぞれ2日、1日遅くなりました。

一番茶摘採日は、「やぶきた」に比べ本場では3日遅く、山間地では4日遅くなりました。「かなやみどり」との比較では、本場では同じで山間地では2日早くなりました。

以上の結果から、本県における「はるみどり」の早晩性は、一番茶摘採期が「やぶきた」よりも3～4日遅く、「かなやみどり」とほぼ同じやや晩生であると思われます。

表1 一番茶萌芽期及び摘採日

調査地	品種名	一番茶萌芽期(月.日)					一番茶摘採日(月.日)				
		2003年	2004年	2005年	平均	差	2003年	2004年	2005年	平均	差
本場	はるみどり	4.13	4.10	4.16	4.13	+6	5.6	5.3	5.4	5.4	+3
	やぶきた	4.6	4.4	4.10	4.7	—	5.3	4.29	5.1	5.1	—
	かなやみどり	4.14	4.7	4.12	4.11	+4	5.5	5.2	5.4	5.4	+3
山間地	はるみどり	4.16	4.17	4.22	4.18	+7	5.6	5.6	5.12	5.8	+4
	やぶきた	4.9	4.10	4.14	4.11	—	5.3	5.2	5.7	5.4	—
	かなやみどり	4.14	4.14	4.22	4.17	+6	5.6	5.11	5.12	5.10	+6

「やぶきた」との差、+は遅い。定植年は2000年（以下同）

参考として、「はるみどり」の特性について試験を行っている他の研究機関の結果では、萌芽期および摘採期が「やぶきた」に比較して6日遅く、「かなやみどり」に比較して3日遅いとなり、本県の結果よりもやや遅い結果となっています。

## (2) 生育特性

「はるみどり」の生育特性は、「やぶきた」に比較して秋整枝時の樹高が低く、株張りがやや広い傾向で、「かなやみどり」とほぼ同じ特性を示します。そのため、樹姿は開張型となります。また、秋整枝量は「やぶきた」に比べ大幅に少なく、「かなやみどり」と比較しても少ない傾向にあります。このことから、「はるみどり」は、「かなやみどり」と同様に三番茶以降、枝条の伸張が非常に緩慢であるといえます。

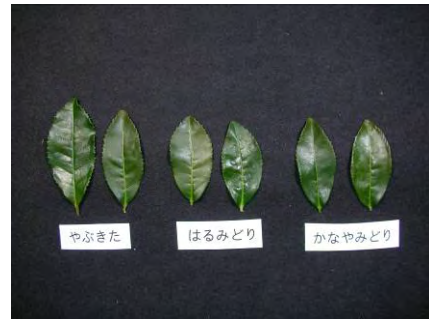


写真1 成葉の比較

他の研究機関の結果でも、樹姿はやや開張型、秋芽の生育停止が早く秋整枝量の少ないことが報告されています。

表2 生育特性

調査地	品種名	樹高 (cm)	株張り (cm)	株張り／樹 高×100 (%)	秋整枝量	
					10a 当たり (kg/10a)	摘採面当たり (g/m <sup>2</sup> )
本場	はるみどり	93	147	158	354	400
	やぶきた	99	140	141	478	578
	かなやみどり	90	141	157	399	473
山間地	はるみどり	88	120	137	301	437
	やぶきた	106	121	114	458	669
	かなやみどり	90	119	132	385	560

データは 2005 年（定植 6 年目）の数値

## (3) 寒害及び病虫害抵抗性

### ア 寒害

「はるみどり」の寒害（赤枯れ）発生程度は、「やぶきた」に比較して本場、山間地とも少ない傾向です。「かなやみどり」と比較しても同等かやや少ないと思われます。このことから、「はるみどり」の耐寒性は強いと思われます。他の研究機関の結果でも、冬季の耐凍性が強く、経済栽培の北限に近い茨城県でも冬季の凍害を受けることは全くなかったと報告されています。

また、鹿児島県で実施した裂傷型凍害の抵抗性検定においても強の評価となっています。

表3 寒害（赤枯れ）の発生程度

調査地	品種名	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	平均	最大
本場	はるみどり	1	1	1	1	1	1.0	1
	やぶきた	1	1	1	2	1	1.2	2
	かなやみどり	1	1	1	1	1	1.0	1
山間地	はるみどり	—	2	1	1	1	1.3	2
	やぶきた	—	4	1	2	1	2.0	4
	かなやみどり	—	3	1	2	1	1.8	3

発生程度：1（無）～5（多）

#### イ 病害虫抵抗性

「はるみどり」の炭疽病の発生程度は、本場では調査期間5年間の平均でグレード値が1.8で「やぶきた」の2.4を下回っています。山間地においても「やぶきた」のグレード値より低い結果です。赤焼病の発生は「やぶきた」に比べて本場ではやや少ないですが、山間地ではやや多くなっています。クワシロカイガラムシの寄生は、「やぶきた」よりもやや多くなっています。もち病の発生は「やぶきた」よりも少ないです。

以上のことから「はるみどり」の病害虫抵抗性は、炭疽病については「やぶきた」よりも強く、「かなやみどり」並です。また、もち病に対しても「やぶきた」よりも強いと思われま。赤焼病は「やぶきた」並の抵抗性で、クワシロカイガラムシに関しては「やぶきた」よりもやや弱いと考えられます。

他の研究機関の結果では、炭疽病は「やぶきた、おくみどり」よりも発生が少なく「やや強」、輪斑病には弱く、クワシロカイガラムシは「やぶきた、かなやみどり」並みに寄生するとなっています。

表4 病害虫の発生程度

調査地	品種名	炭疽病 <sup>1)</sup>		赤焼病 <sup>1)</sup>		クワシロカイガラムシ <sup>2)</sup>		もち病
		平均	最大	平均	最大	平均	最大	平均
本場	はるみどり	1.8	3	1.6	2	2.7	4	—
	やぶきた	2.4	3	2.2	3	2.0	3	—
	かなやみどり	2.0	3	2.4	4	2.3	3	—
山間地	はるみどり	1.8	3	1.8	3	2.0	3	1.5
	やぶきた	2.8	4	1.5	2	1.7	3	2.9
	かなやみどり	1.8	3	1.5	3	1.7	3	—

もち病は「もち病特性検定試験（調査地：旧本川根町須山）」のデータで1993～1999年の発病葉数（枚）の平均

<sup>1)</sup>本場は2001～2005年の平均、山間地は2002～2005年の平均

<sup>2)</sup>2003～2005年の平均、<sup>1、2)</sup>発生程度：1（無）～5（多）

### 3 収量特性

「はるみどり」の10a当たり生葉収量を「やぶきた」との比較で見ると、本場では定植4年目の2003年において一番茶が197%と2倍近い収量があり、その後差は縮まりますが3ヶ年平均では152%となります。「かなやみどり」と比較しても多収傾向です。年間収量で見ても同様の傾向であり、3ヶ年平均では「やぶきた」比で137%です。山間地でも3ヶ年平均で、一番茶が127%、年間が138%となり「やぶきた」を上回っています。

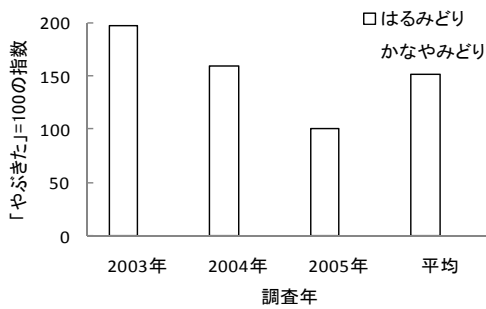


図1 10a当たり生葉収量(本場・一番茶)

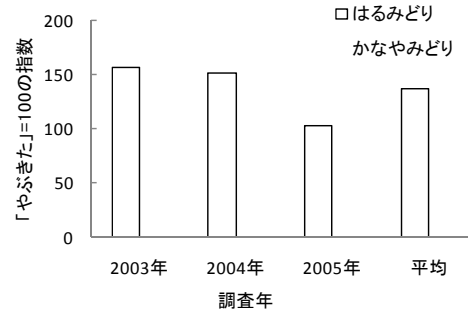


図2 10a当たり生葉収量(本場・年間)

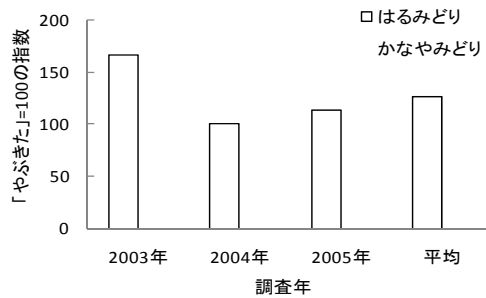


図3 10a当たり生葉収量(山間地・一番茶)

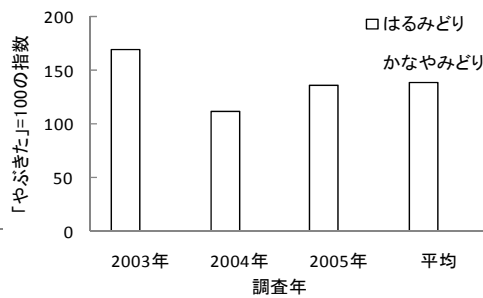


図4 10a当たり生葉収量(山間地・年間)

摘採面当たり生葉収量では、本場では定植4年目の2003年に「やぶきた」比で一番茶が197%と多く、3ヶ年平均でも144%となっています。「かなやみどり」との比較でも「はるみどり」が多い傾向です。年間では3ヶ年平均で128%となっています。山間地では、3ヶ年平均では「やぶきた」比で一番茶が126%、年間で137%と「やぶきた」を上回っています。

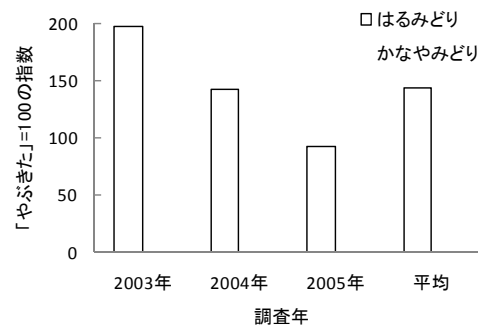


図5 摘採面当たり生葉収量(本場・一番茶)

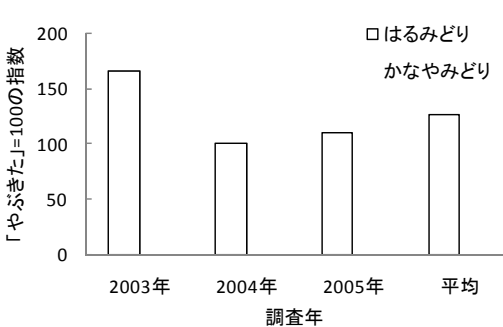


図6 摘採面当たり生葉収量(山間地・一番茶)



他の研究機関の結果でも、概ね「やぶきた」よりも収量性が高く、一番茶では 20～50%、二番茶でも 10～30%程度多収を示しました。

以上の結果から、「はるみどり」の収量特性は「やぶきた」と比較して高いと思われます。また、「かなやみどり」との比較でも、本場においては高い傾向でした。

一番茶の摘芽特性は、摘芽長は「やぶきた、かなやみどり」と比較して長く、百芽重は小さい傾向です。摘芽数は、「かなやみどり」よりも多く、「やぶきた」よりも少ない傾向です。

表 5 一番茶の摘芽特性

品種名	摘芽長 (cm)	摘葉数 (枚)	百芽重 (g)	摘芽数 (本/400c m <sup>2</sup> )
はるみどり	3.9	3.0	36.7	48
やぶきた	3.3	3.1	48.8	51
かなやみどり	2.8	3.0	45.2	36

本場 2005 年のデータ



写真 2 一番茶新芽

#### 4 品質特性

官能検査によると、「はるみどり」の一番茶品質は、形状、色沢、香氣、水色、滋味の合計点では調査した 3ヶ年の平均で「やぶきた」に比較して本場では 104%と高くなりました。項目別では、色沢、香氣が特に優れています。山間地では合計点で 107%と高く、項目では滋味、形状が優れています。また、審査概評では、「鮮緑、甘い香り、芳香、旨味」などのコメントがありました。これらのことから、「はるみどり」の一番茶品質は総合的に優れていると思われます。

二番茶の品質については、「やぶきた」に比較して本場では合計点が 116%と高く、特に香氣、色沢、水色が優れていました。山間地では合計点で 106%、項目では色沢が優れていました。

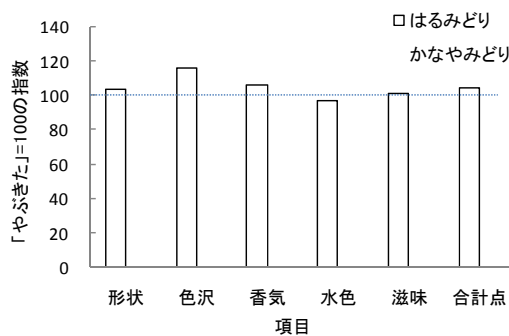


図7 官能検査結果(本場・一番茶)

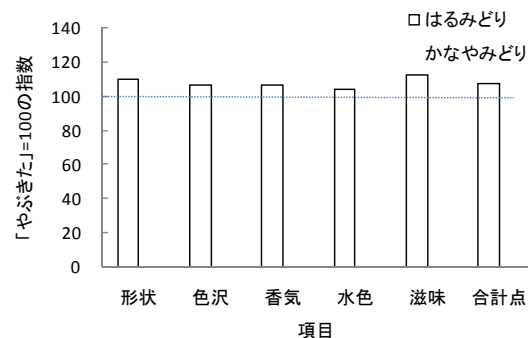


図8 官能検査結果(山間地・一番茶)

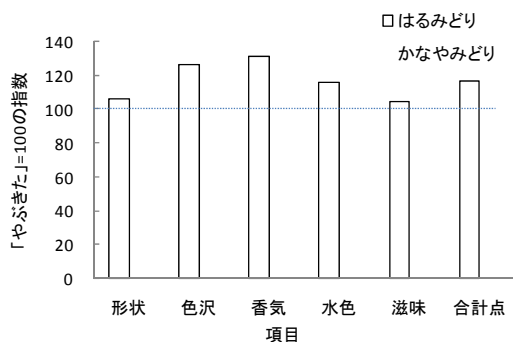


図9 官能検査結果(本場・二番茶)

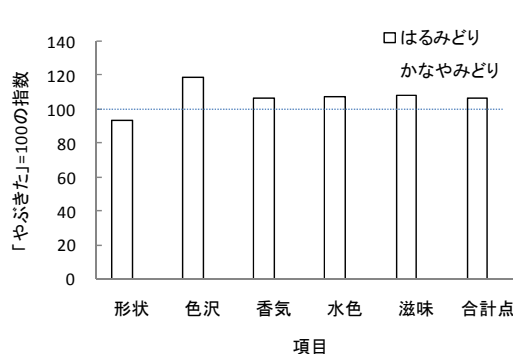


図10 官能検査結果(山間地・二番茶)

他の研究機関の結果では、総合的に見て「やぶきた」と同等以上の品質であるとし、個々の品質では、外観は鮮緑色で細よれし優良であり、滋味は渋味が少なく旨味に富むと評価されています。

以上のことから、「はるみどり」の品質は、一番茶、二番茶とも「やぶきた、かなやみどり」に比較して、総合的に優れていると思われます。

## 5 特性のまとめ

- 早晚性は、一番茶摘採期が「やぶきた」に比べて3～4日遅い「やや晩生」です。
- 樹姿は「開張型」で、樹勢は「中」です。
- 耐寒性は赤枯れ抵抗性が「強」です。
- 耐病虫性は、炭疽病、赤焼病、もち病とも「やや強」と思われます。クワシロカイガラムシに対しては「やや弱」です。
- 収量性は一番茶、年間とも「やぶきた」よりも多い、「やや多」です。
- 品質は総合的に「良」で、色沢、滋味、香気が優れます。



写真3 一番茶摘採面

## 6 適地及び栽培上の留意点

調査した本場（牧之原）、山間地（川根）、富士分場のいずれも冬期の寒害に比較的強く、収量性も「やぶきた」以上であったことから、県内全域に適する品種だと思われます。ただし、本品種は高い品質がセールスポイントの品種ですので、その品質が活かせる経営、また、幼木時に十分な管理が可能な経営に、より一層適しています。

本品種は幼木時の生育が緩慢ですので、早期に成園化を図るためにも肥培管理など十分に管理することが必要と思われます。また、開張型品種ですので、強いせん枝を避け、樹高を

上げるような管理が必要です。

なお、苗木の入手については静岡経済連が育成者と許諾契約を結んでいますので、県内の農協で入手が可能です。

## おわりに

最近の品種の普及状況を見ると、「つゆひかり」や「さえみどり」など品質が優れる品種の伸びが目立っています。しかし、これらの品種はいずれも早生品種であり、晩生品種でこれらに匹敵する品種は見あたりませんでした。今回紹介した「はるみどり」は、「やぶきた」を凌ぐ優れた品質が最大の特徴であり、今まで品質面でやや物足りなかった晩生品種の有力な候補であると思われます。

「はるみどり」は育成されて10年近く経過しますが、静岡県内においてはまだ知名度が低く、導入も進んでいません。今回の調査により本県における適応性が明らかになり、特に品質面での優秀性が確認できましたので、今後生産現場に積極的に普及され、茶産地振興の素材となることを期待します。

## 参考文献

- 1) 武田善行ほか, 2002. 煎茶用新品種‘はるみどり’の育成, 野茶研研報, 1, 1-13.

静岡県農林技術研究所 茶業研究センター  
研究主幹 鈴木康孝



平成21年8月発行

静岡県産業部振興局研究調整室

〒420-8601

静岡市葵区追手町9-6

TEL 054-221-2676

